

奇人変人の視点です。

その1；吾が人生の根底には「陰陽二元相対（待）性原理」を踏まえて、「対等互敬（恵）」の精神を当たり前としています。「人間の力は分別知、すなわち自分の能力は有限値」です。

例えば、「私の好物はお酒に醤油を垂らして飲むこと」とします。その時の声は次の二つとします。

- ・ そんじょそこの①さん； そんなのおいしくないだろう！
- ・ 料理研究家の ②さん； 食材の素地を殺していることになり邪道である。

①の反応は、人それぞれで無視の範疇です。

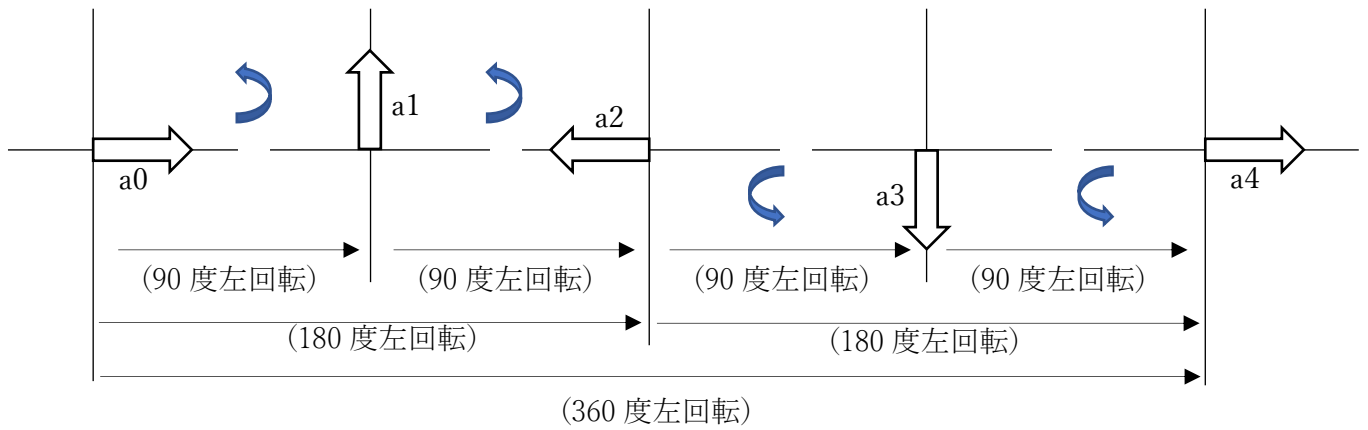
②の反応に反撃します。「私の飲み方が悪いと憲法の何条に書かれていますか？」と仕返しします。この考え方はおかしいですか？（おかしいという人は頭脳の一部が壊れています。）

地球上に80億人が生きており、たった一つの事象に対して80億通りの観方があり、ましてや、「もの・ことの事象」は無数にあります。すなわち、 $80 \text{ 億} \times \infty$ （無数） $= \infty$ （無限）となります。つまり、

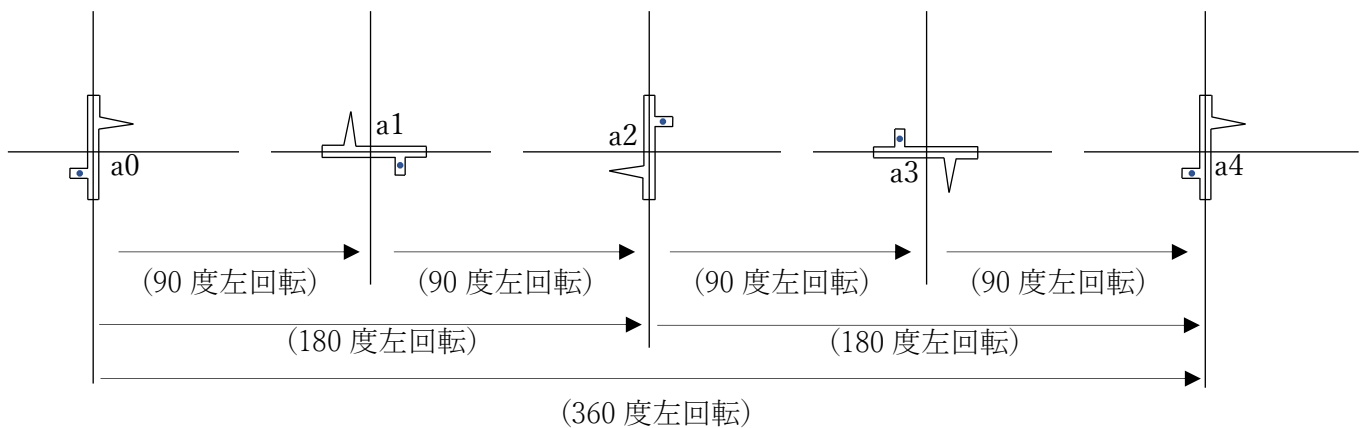
「一つのもの・ことの事象」に対して無限の回答がある、いわば絶対的^{N o n}真の回答がないということです。そこで、人それぞれ、俺が正しいとか、あれは間違っているとか言って争っても、優劣・勝負は永遠・永久に付かない、どちらか引いた妥協は恨みと表裏一体です、よって所詮は無意味ということです。無意味でない^{N o n}というのなら100歩譲って、無限の回答を80億通りの回答を並べるべきです。

そんなことをつらつら思う時に気になったのが「回転と逆さとねじれ^{さか}」の事象についてです。特に「逆さとねじれ」は、「正直^{せいちよく}」に対する反語を指します。人間としての有り様は何かにつけて当然「正直」に生きることです。しかし、あえて「逆さとねじれ」にフォーカスします。ここで想起したのが、世にいう「奇人変人」です。普通には常識を外れた人、いわゆる変わり者として嫌います、アウトロー扱いします。私は奇人変人はすなわち独創性の高い人と考えています。私は金太郎飴的集団への仲間入りを嫌います。人間はX軸・Y軸・Z軸の三次元空間に生きています。「俺の考えは唯一の正論だ」と頑張った^{さか}所で、一次元、あるいは2次元に留まっていること——本人が自覚出来ない視野狭窄症を発症——が普通です、自戒！自戒です。

その2； 科学的な難しい論理考証はさておき感覚的に進めます。「回転と逆さとねじれ」の物理的な意味合いは図-1・2のとおりです。回転の向きは右左どちらでもよいが、ここでは左回転とします。また、90度回転をねじり（ねじる）＝ひねり（ひねる）とします。180度回転を反転とします。360度回転は元に戻ります。論理展開において「正」の否定の否定は、つまり、二重否定は肯定となります。「正」の否定（180度左回転）の否定（180度左回転）は肯定（360度回転）となります。私からするとこれは面白くありません。直線上での回転は、上記のとおり180度で反転するが、360度では元に戻ってしまいます。「直線上での」回転と記述したが、実は『1点（基準点、原点、定点）』を中心に回転させていたの^{さか}であります。これに人を当て嵌めれば、“俺は柔軟な発想で独創的だ 既成概念を打破し進取の気概を実践しているのだ！”などと豪語・己惚れても所詮は、「有限値の範疇」なのです。ひねった・ねじった（90度回転）としても、反転・逆転（180度回転）したとしても、所詮は定点でいじくり回しているに過ぎないのではないかと思う訳です。



図－1



図－2

その3；もの（万物・空間）の構成についてです。図－3を参照のこと、ものは、点（1）から始まり、線（2点で構成）、面（3点で構成）、立体（4点で構成）のいずれか、あるいはそれらの組み合わせによって成り立っています。現代社会における数の表記に広く使われている文字体系は、10を底とする位取りの十進記数法ですが、「 $1 + 2 + 3 + 4 = 10$ 」となり、合計値は底の10と一致するのです。

	点	線	面	立体
イメージ図形	○ ●	○○ ○————○	○○○ △	○○○○ 立方体
配分源数	1	2	3	4
合計	1 0			

図(表)－3

その4；私の心の師匠「安岡正篤」氏（大正から昭和にかけての偉大な思想家・教育者・陽明学者）は、物事を考える時は思考の三原則「長期的・多面的・根本的」が大事であるとおっしゃられています。よくビジネス界で取り上げられます。いわゆる雑駁な人には備わりません、何事もち密に探究する姿勢の人には自然と身に付いて来る癖であります。この三原則を私が図形処理すると図-4 のようになります。

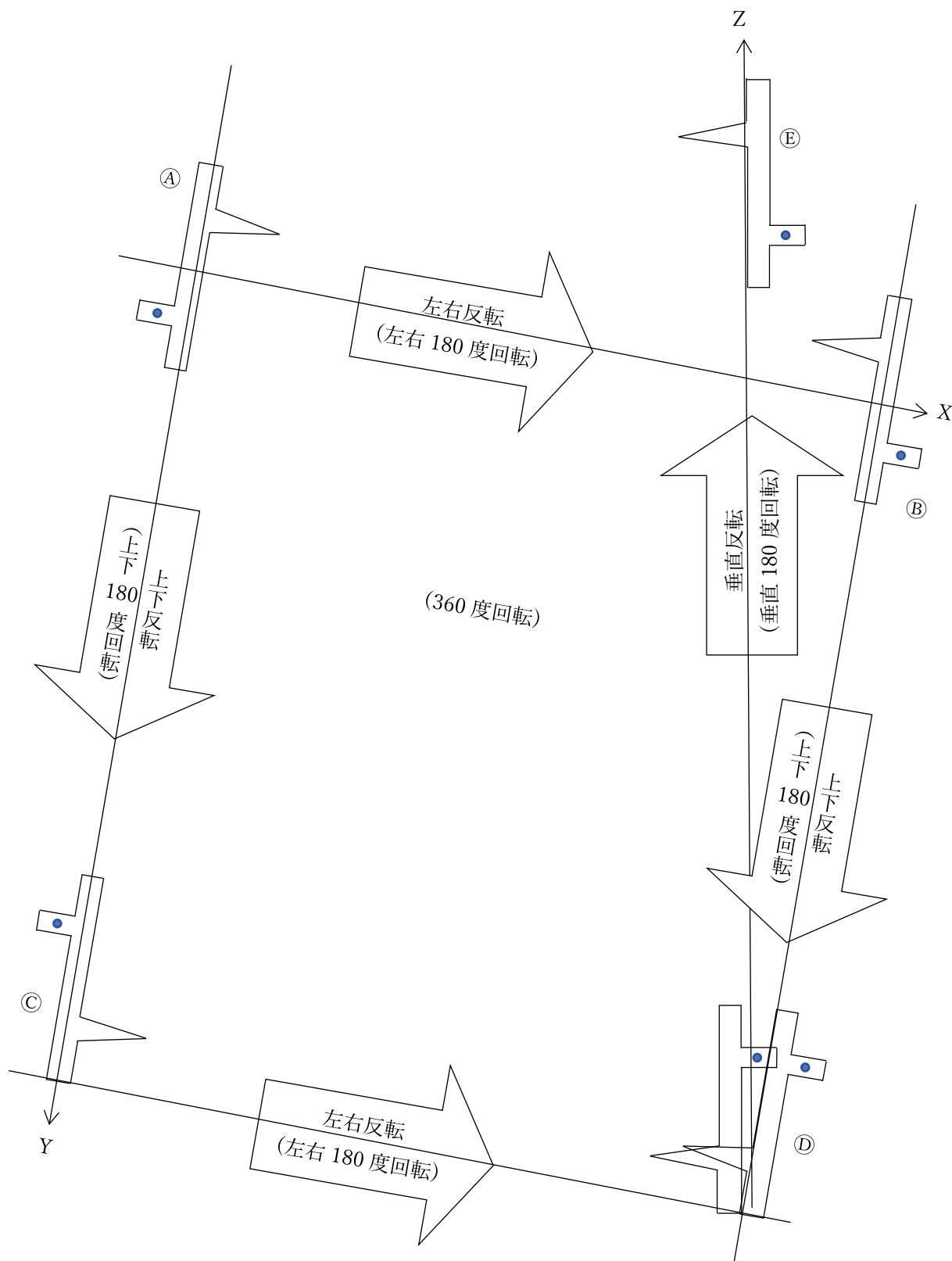


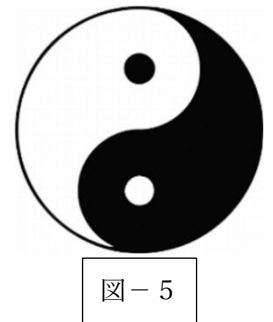
図 - 4

人間は三次元空間に生きていますので、横線横軸（X軸）とこれに 90 度ひねって縦線縦軸（Y軸）の平面を当て、さらに両者に 90 度クロスする第三の斜線斜軸（Z軸）を設定します、紙の上に三次元を表示することは不可能であることから想像力を発揮します。左上隅の図形④を基準として、左右反転、上下反転させて見ました。一般的なイメージは上下反転を「逆さ」、あるいは、左右反転を「ねじれ」と言うでしょう。しかし、私はそれでは中途半端であり別の見解です。その理由を以下に記述します。

☑1;まずは人間が生きている三次元視野と人間活動のことです。横軸直線とそれにクロスさせた縦軸直線の 2 要素を以って平面を形成し、さらに、それぞれにクロスする新たな直線の方^{N o n}向を加えて三次元空間を形成します。「正・反」があるならば横軸上における反転は⑤になります。さらに同直線上で左右反転させれば、反の反は正で元の④に戻ります。進歩発展^{N o n}なしです。縦軸上においても、上下反転⑥をさらに同直線上で上下反転させれば④に戻ります。

☑2;さて、一般概念は発展的三段階のヘーゲル弁証法「正・反・合」を持ち出して加味します。これは横の⑤の展開、あるいは縦の⑥の展開で帰結するものではなく、さらに方向をクロスさせて「反」を作用させた⑦の展開を以ってより高度な「合」を定義付けるものだ^{N o n}と解します。換言すれば「正・反・合」と空間三次元を結び付けたのが図－4 であります。

☑3;さらに、『陰陽二元相対（待）性原理』の「（魚眼）太極図」（図－5）を重ねます。私は何かに付けてこの原理を持ち出すが、言葉で説明すれば「^{（前）}陽中陰あり、^{（後）}陰中陽あり」――陰（反・逆）と陽（正）は永久にせめぎ合い、優劣の決着は永遠に付かない。――となり、「前後二つでワンセット（密接不可分）」です。前者は横軸直線上の反転であり、後者はそれをさらに方向をクロスさせた縦軸直線上で反転させたもの、つまり、森羅万象は④⇒⑤⇒⑦に、もしくは、④⇒⑥⇒⑦の過程・経過を踏まえて繁栄流転するというものです。なお、この原理（自然の法理）はとても面白いものですが、別記しここではこれ以上触れません。



その 5 ; 以上を踏まえ、そこに人間を重ね、⑤あるいは⑥の立ち位置は一次元の直線上でのこと、これを奇人変人というのだろうか、言わない！^{N o n}（すでに回転させているではないかと言いたくなるが、それは横・縦に係る共通要素なのでネグレクトする。） 私達の空間は三次元です。本当に頭の思考回路が柔軟で独創性豊かというのは、⑦の立ち位置を持っている人であろうと思います。つまり、常識に対して 360 度回転思考のある人を、立体視観の個性豊かな真の奇人変人と思っています。

この娑婆の同調圧力に屈し振り回されているようでは、いつまで経っても一色者(もの)の金太郎あめの集団に埋没し、いつも不平不満を抱えてストレス満タンで生きていることになりま^えす、私の得とする生き方ではありません。

(end)